

白い霧が立ち籠める中、街路のガス灯が淡い光を投げている。

その古物店は、大通りから外れた場所にあった。すでに人通りも絶え、辺りは静寂に覆われている。

だが、その静寂を破り、一台の二輪馬車トラップが通りに現れた。

馬車は古物店の前で停まる。客席は無人だ。だが、御者の男は御者席から降りると、車体を回り込み、座席の上に手を伸ばした。

「残念ながら、古物店は留守ですよ、ミスター・ステイブルトン」

男が弾かれたように、こちらを向いた。

丈の長いフロック・コートにトップハット姿は、古風ながら堂々とした装いだ。ただ、コートには汚れや繕いの跡が見て取れる。また、装いとは反対に、体格は貧弱と言えるだろう。身長こそ高いものの酷い痩身で、長い手足が針金のように伸びていた。

「こちらの要件はおわかりかな？ 《ジャック・ザ・ナイトメア》の殺人に関して、お伺いしたいことがあります。お付き合い頂けませんか？」

通りの反対側に潜んでいたアーサーとコナンは、ゆっくりと車道に歩み出た。

男はじつと二人をにらみつけた。

「……断る。なんのことだか、わからない」

「なら、その座席に積んだ物を調べさせてもらっても？ 血痕というのは、そう簡単に落とせるものじゃない。昨日の今日だ。すぐにわかります」

「……………」

男は沈黙したが、アーサーの台詞の意味は理解しているのだろう。ブルブルと肩を振るわせている。

アーサーは一度息を吸い、改めて切り出した。

「どうか、無駄な抵抗は止めて下さい、ミスター・ステイブルトン。それとも、こう呼びびした方がよろしいですか？

ロジャー・バスカヴィル卿」

その瞬間、男の全身が大きく痙攣した。顔が赤く染まる。拳を固く握り締め、奥歯を激しく噛み締めているのがわかった。

コナンが警戒を強める。男はまだ動かない。

だが、彼が次の行動に出るより早く、事態の方が先に動いた。

「もういい。そこまでだ、アーサー。ロジャー・ステイプルトン。殺人の容疑で連行する」
男と馬車が一齐に、四方から照らされた。

薄闇を斬り裂く真白い光は、反射鏡の付いたランタンの明かりだ。照らしているのは、古物商周辺に待機していたスコットランド・ヤードの警官たちである。物陰から飛び出すと、たちまち遠巻きに男と馬車を包囲した。

「警部！ まだー！」

「すまん、アーサー。この一件、上の耳にも届いちまってな。取り調べには呼んでやるから、あとは本部でやってくれ。まず身柄を抑えさせてもらう！」

警官たちの中から、クラウスが前に出て叫んだ。アーサーは舌打ちしたが、すでに事態は動いたあとだ。目配せされたコナンが、頷いて《Eソード》を構える。バチツと剣身にスパークが走った。

一方……。

男は何も答えなかった。

が、やがて、

「……平民風情が……」

唸るように吐き捨てた。

こちらを見やる双眸は、夜霧の中、なお炯々と光って見える。たくわえた口ひげの下から、剥き出しになった歯が、鈍く光った。

「いいだろう！ ならば、目に物を見せてやる。身の程を知るがいいわ！」

男が怒鳴りながら、座席に取り付いた。

座席に積まれている「何か」に手を伸ばす。アーサーが顔色を変えた。

「不味い！ 動くぞ！」

アーサーが大声で警告した。

その直後――

座席の荷物が、ぐわっ、と立ち上がった。

全身に光を浴びて、霧の中に屹立する禍々しい姿。

バスカヴィルの魔物。

「ニッポンの自動機巧人形《ナイトメア》だ！ 気を付ける！ そいつは――人型の殺人機械だ！」

*

魔物退治。

そう言つて屋敷をあとにしたアーサーは、ベリルから受け取つた紙の束を頼りに、一軒の古物店を訪れた。

「ああ、はいはい。いらつしゃいましたよ？ 漆塗りの修繕が出来るかという問い合わせでした。物にもよりますが出来なくはないと申し上げましたら、夜、もう一度来ると仰つて」

古物店の店主の台詞を聞いたアーサーは、その場で「よしっ」と拳を握り締め、老いた店主の目を白黒させた。もちろん、コナンの目もだ。

しかし、アーサーは周りの反応など気にも止めず、店主に市警を連れてくるから指示に従うよう言いぐるめて、店をあとにした。

「ここで足取りを掴めるかどうかが一番の懸念材料だったが、実に理想的な展開だ。これならスコットランド・ヤードにも応援を頼める。一気に片を付けてしまおう」

「アーサー。例によつて、置いてけぼりだ。頼むから少し説明してくれ」

二輪^{ハレンサム}馬車を止めて飛び乗つたアーサーは、スコットランド・ヤードに向かうよう御者に告げたあと、

「よし。じゃあ何から聞きたい？」

「順を追つて説明してくれ。今朝の首切り死体とベリルたちの父親は、何か関係があるのか？」

「残念ながら、そのようだ。朝、マリーに頼んだことを覚えてるかい？」

「新聞の寄稿記事を調べてくれてやつだろ？ あと、不審人物の目撃情報だったか」

「後者は空振りだったが、前者は当たつた。今回の被害者二人は『市民解放会』のメンバーだったが、この団体のことは知ってる？」

「いや、あまり。一般人の権利を主張してる政治団体つてことぐらいだ。革命百周年に向けて、活動が活発化してるそうだが……」

「十分だ。実際、連中の主張というのは、革命で得た市民の権利がいかに尊いか訴えてるだけだからな。ただ、もうひとつの側面として、貴族制への厳しい批判というのがある」

「ああ、やたらと神聖ブリタニア帝国を敵視してるのは知ってる。革命から百年経つたいまも、とにかく貴族を目の敵にしてるらしいな」

「そうした論調をかなり過激に綴つた記事が、六日前の朝刊に寄稿されていた。革命百周年の祭典に向けたパフォーマンスだが、結果的にこれが引き金になつたんだろう」

「なんの？」

「六日前というのは、ステイプルトンの当主が家を出た日だ」

言われて、「あ」とコナンも気がついた。

ベリルは、その日の朝も父親は痲癩を起こしたと言つていた。『市民解放会』の寄稿を読んで、

激昂したということだろう。

「ま、待ってくれ。じゃあ、今回の被害者を殺害したのは、ベリルたちの父親だって言うのか？ 記事に腹を立てたから？ いくらなんでも、それは……!？」

「確かに尋常ではないが、実際尋常ではない精神状態なんだろう。身分を偽るステイプルトンには、その寄稿が、まさにいまの彼を直接批難しているように感じられたのかもしれない」

「だ、だとしても無茶だ。第一、どうやって？」

「最初の被害者は、新聞に寄稿した当人だ。ステイプルトンの当主が行方を眩ましたのが六日前で、被害者が殺されたのが四日前。この間に被害者を捜し出したんだろう。」

二人目は一人目を焚き付けて記事を書かせた男で、これまた貴族嫌いで有名だったらしく――

「待て。そうじゃなくて、俺が言ってるのは、殺害方法だ。今朝の件は覚えてるだろ？ 腕の立つ外科医でもなければ、人体の首をあんな風には切断できない。ステイプルトンには不可能だ」

いや、仮に腕の立つ外科医だとしても、あの犯行は実行不可能だと結論が出たはずだ。

するとアーサーは、コナンに小さな紙切れを渡した。電報だ。

『今日ハ無理。ロンドンニハ来週戻ル。ナツメ』

「……これ、銀助からか？ さては、いますぐ戻って来いって無茶を言ったな？」

「無茶なんもんか。鉄道はずっと動いている。あいつが戻らないのは、ただの怠慢だ。あと、それは一通目。これが二通目と三通目だ」

『所望サレタ書物ハ、窓際ノ長持ノ中。ナツメ』

『追伸。クレグレモ他所ヲ漁ルベカラズ。ナツメ』

「書物？」

「以前あいつの部屋で見かけたのを覚えていたんでね。こいつさ」

アーサーが取り出したのは、変わった紙質、変わった装丁の本だった。先ほどステイプルトン邸の物置で、木箱の短冊と見比べていた本だ。アーサーによると「和紙」で出来た「和綴じ」の本らしい。

「銀助の私物ということは、これはニッポンの本か？ 表紙の文字も現地のものみたいだが、君は読めるのか？」

「読めない。だが、幸い中には図説があつたし、銀助の部屋にはニッポンの英訳辞書もあつたから、最低限必要な情報は入手できた」

「一体、なんの本なんだ？」

「とある科学の……というより、一人の天才による発想と、職人技術の結晶。ある意味、ひとつの到達点と呼ぶべき物に関する本だ」

いつになくもつたいぶつた言い様で、アーサーは本をめくり、中にある図説のひとつをコナンに見せた。

コナンの視線が、引き寄せられる。

「これは……東洋の甲冑か？ しかし……」

一見したその図説——鎧と兜の絵図は、細部に至るまで丁寧に描かれていた。東洋の工芸品に通じる、日頃馴染みのない種類の「美」を感じることができる。

ただ、同時にその絵図は、どこか禍々しかった。

鎧にせよ、兜にせよ、細やかな装飾が施された手の込んだ物だとひと目でわかるのに、言葉にしづらい「不吉さ」が滲んでいるのだ。

「自動機巧人形」

重々しく、アーサーが言った。

「中でもこいつは、対人戦に用いられた、『ナイトメア』という自動機巧だ」

「『アウトマタ』？ 機巧人形のことか？ ゼンマイで動く、からくり人形のことだよな。オルゴールなんかと一緒に買った？」

「おそらく語源はその辺りなんだろうな。からくり仕掛けの機械人形という意味でも間違つてはいない。だが、ただの人形じゃない。サクラダイトを使用した高機動型の自動人形だ。さらに言えば、この自動機巧人形には『心電回路』というオカルト的な機構が組み込まれていて、使用者と同調することで、かなりの部分が自律的に駆動する仕組みになっている」

「オカルトって……」

「『心電回路』を開発したヒラガなる天才科学者は、心霊現象を電氣的に解釈していたらしい。その応用と言うことだそうさ。大変興味深いんだが、残念ながら詳しいことはまだ読解できてない。ただ確かなのは、ニッポンの開国時、この自動機巧人形が各地で猛威を振るつたということだ。サムライたちは戦闘用自動機巧を用いて、敵対勢力を次々と『辻斬り』つまり暗殺したと言う」

「暗殺！？ じゃあ、まさか……」

青ざめるコナンに、アーサーは神妙に頷いた。

「対人戦用の《ナイトメア》は、武器を装備している。最も多いのは槍だが、中には『カタナ』と呼ばれるニッポンの剣が装備されている例もあるらしい。」

そして……ニッポンのカタナ、『日本刀』は、世界で最も斬れ味鋭く、強靱な刃物だ。彼の地の罪人は、これで首を切り落とされるらしいからな」

「……なんてことだ」

コナンは改めてアーサーの本に視線を落とした。物言わぬ甲冑の魔物じみた仮面が、ニタリと笑っている気がした。

「……ステイプルトンは、その《ナイトメア》を使って殺人を？」

「さっきの木箱の蓋には、ニッポンの言葉で『自動機巧人形』と書かれた札が貼られていた。おそらく、先代当主のチャールズ・バスカヴィルがニッポンから持ち帰った物だろう。魔物騒ぎが起きたのも先代の頃だ。帰国後チャールズが《ナイトメア》を起動し、それが目撃されたんだろうな。その後《ナイトメア》は次の当主に受け継がれ、彼と共にロンドンに渡った。そして、今回再び甦ったわけだ。今度はロジャー・ステイプルトンの手によって」

そう言うと、アーサーはさっきの紙の束を取り出した。

「だが、二度目の殺人の際、ステイプルトンが操る《ナイトメア》は、外装の一部が破壊された。遺留品にあつた部品がそれだ。君も気付いたようだが、漆の塗装が施されていただろ？ 被害者の持ち物にステッキがあつたが、真新しい傷跡が残っていた。おそらく、何かの弾みでステッキが鎧の隙間に挟まったんだ。僕は、彼がその傷を放置せず、修復すると予想した。この紙の束は、ステイプルトンがロンドンで金銭のやり取りをした記録だ。中に、さっきの古物店もあつた。駄目元で尋ねてみたが、まさかのビンゴさ。ステイプルトンは、今夜あの古物店に《ナイトメア》を持ち込みにやってくる。彼を捕らえる、絶好の機会だ」

「……それでレストレード警部に応援を頼むのか？」

「相手は殺人機械だからな。それに……他にも懸念事項がある」

「まだ何かあるのか？」

悲鳴じみて聞き返すコナンに、アーサーは一度口を閉ざし、ゆっくりと切り出した。

「ベリル嬢の話では、ステイプルトンが夜遊びを始めたのは、今年の春先から……これは、《ジャック・ザ・ナイトメア》の事件が始まった時期に一致する」

アーサーの台詞に、コナンは息を呑む。

「そうか！ 彼は、本物の仮面を持っていた……じゃあ、まさか彼が……」

「さて。《ジャック・ザ・ナイトメア》の通称はマスコミが付けたものだが……」

ステイプルトンが操る自動機巧人形の呼称は《ナイトメア》。偶然だろうか。嫌な符合だ。

「彼を《ジャック》だと断定できる論拠は、さすがに僕も持たない。ただ、そうすると現場に残されていた仮面が説明できないんだ。その点はなんととしても、本人から聞き出さねばならぬが……」

*

「……そんな余裕は見事になくなったな！ コナン！ 頼むから、しっかり守ってくれよ！ 僕を！」

「いきなり人頼みか！ いいけれどもー！」

清々しいまでの他力本願だが、下手に手出しされる方が厄介だ。コナンは数歩前に飛び出し、アーサーを背後に庇う。

その瞬間、馬車がガシャンツと大きく揺れー

魔物の影が宙に跳ねた。

バサリと頭上に翻る黒い影に、翼はなかったんじゃないのかと心のどこかが抗議する。

が、大きく翻った影は、そのまま、ズシャツ、と石畳に着地した。

それから、ぬっ、と伸び上がる。

頭の芯が痺れるようだった。

包囲した警官たちも、呆然と息を呑んでいた。

それは巨人だった。身長は七フィート、いや八フィートに達するかもしれない。身体を覆うフード付きのマントを纏っていた。ランタンの明かりを浴びるそれは、まるで巨大な影法師だ。

しかし、

それはフードを跳ね上げ、マントの下から長い両腕を覗かせた。現れたのは、本にあった絵図通りの姿。禍々しさの中、どこか美しさも兼ね備えた、東洋の動く甲冑だ。

魔物のそれを連想させる一對の角は、兜の立物。漆で黒く光る鎧には、脇の辺りに破損した跡があった。節々から覗くのは、人体ではなく歯車などの機械。そして、巨体を支える、大きな足。

あれが、自動機巧人形《ナイトメア》。

殺人鬼と同じく、「悪夢」の名を冠する魔物。

「むむっ！ 遺留品を見てまさかと思っただが、骨格はやはり木製か？ だが、火器よりサムライソードを想定するなら、十分有効だ。とすれば機動力は相当高い！ 気を付ける。でかいが

身軽だぞ！」

「さっきの跳躍ジャンプでわかってる！」

あの跳躍力なら、地下室の天窓からでも悠々出入りできたはずだ。壁にも、また屋根の上にも、軽く飛び上がっただろう。

アーサーの警告に、警官たちも自失の体から立ち直る。

それを待っていたかのように、《ナイトメア》が両腕を交差させて腰に回した。

左右に装備していた日本刀を抜き放つ。

長大で美しいふた振りの白刃が、ランタンの明かりを反射し、キラリと光った。

「来るぞ！」

クラウスが叫び、同時に発砲した。

銃弾は見事に命中したが、《ナイトメア》は意に介さなかった。

ガシヤツ、ガシヤツ、と思いの外軽い、乾いた音を響かせながら、包囲網の一角へと飛び出す。巨体を物ともしないその動きは、機械と言うより、まるで生物——もしくは、まさに「魔物」だった。

《ナイトメア》が、ぶうん、と両腕を振るった。

警官たちの構える警棒が、チーズのように斬れ飛んだ。コナンは思わずあんぐりと口を開けたが、そんな余裕はすぐになくなった。

「来るぞ!？」

《ナイトメア》がこちらを向いた。ビクツとした次の瞬間には、コナンの方に飛びかかってくる。早い。だが——と半ば麻痺したコナンの脳髓が、それでも冷静に判断した。

早いが、動きは稚拙だ。

対処できる。

「……っ！」

白刃が迫った。コナンは《Eソード》で刃を跳ね上げる。《ナイトメア》が鋭く反応し、抵抗したコナンに注目した——が、そのときにはコナンは身をかがめ、巨体の腕をかくぐって——

その胴体に《Eソード》を叩き付けた。

ピシッ、と鎧にわずかな亀裂が走る。

同時に、

「喰らえ！」

スイツチを押す。《Eソード》の剣身を電流が駆け抜け、バチバチバチッと破裂音が響いて、

《ナイトメア》の胴体部にスパークが走った。

だが、

「コナン！ 敵は木製だ！ 電撃の効果は薄いぞ！」

マジかよと胸中で毒づきつつ、コナンは勢いのまま《ナイトメア》の脇をすり抜ける。一瞬遅れて、彼がいた位置を、もう片方の白刃が知り抜けた。

どっと全身の毛穴が開く。嫌な汗が噴出する。

反転して向き合った《ナイトメア》が、両腕を高く持ち上げた。ふた振りの刃がギラつきながら掲げられ、コナンの視線が吸い寄せられた。

次はどちらだ。どんな軌道で、どう振り下ろす？ コナンは意識せず、重心を前に。アーサーの《Eソード》は威力に反し軽量だ。使い慣れたナイフを構えるように、コナンは迎撃態勢を取る。

しかしそのとき、停車していた馬車を牽く馬が、前脚をもたげて、高い嘶きを上げた。

「ハアッ！」

振り下ろされた手綱に従い、さっき《ナイトメア》の突入で崩れた包囲網の穴に、ロジャー・ステイプルトンに乗せた馬車が突っ込んで行く。

「来い！」

主の命に従い、《ナイトメア》は再び跳躍、ガタンツと馬車を揺らしつつ、座席の上に着地した。

包囲を突破した馬車が、石畳を蹴って霧の中に走り去る。

「いかんっ。追うぞ！」

クラウスが大声を上げたが、警官たちの反応は鈍い。無理もなかった。あまりに唐突で予想外の展開が続いている。

しかし、アーサーは違った。

「コナン！ 乗れ！」

路地に隠していた自転車に乗り、アーサーが飛び出した。ただの自転車では、無論、ない。

《Eバイク》。数日前アーサーが再調整したばかりの発明品だ。

「こいつは爆発しないだろうなっ？」

「十分以内なら大丈夫！」

そうか。十分か。

一瞬達観した表情が過ったが、それでもコナンはアーサーの背後、《Eバイク》の後部座席に飛び乗った。

*

「遠距離攻撃できないのがもどかしい！ やはり《Eガン》、もしくは《Eボウ》の開発は急務だな。構想はあるんだ。強力な電磁誘導によって、伝導体の弾丸を超高速でー」

「あとにして、いまは運転に集中してくれ！ あの人形、こつちを見てるぞ！ ほんとに意思があるみたいだ！」

霧の中疾走する二輪馬車^{トラップ}を追い、アーサーの《Eバイク》が唸りを上げていた。高速回転するモーターの稼働音が、鼓膜に張り付くかのようだ。

御者席ではロジャーが「ハアッ！」と何度も手綱を振るい、馬車を牽く馬を急ぎ立たせている。また、座席では物言わぬ東洋の甲冑が、両手に日本刀を携えたまま、じつとこちらを見据えていた。

「……あのサムライソードが、首切りの凶器なのか？」

「間違いない。熟練の技で用いられた日本刀は、外科用ナイフに匹敵する斬れ味を発揮する。ステイプルトンにそんな技量はないだろうが、あの《ナイトメア》は『そのため』に作られた自動機巧だ」

「バスカヴィルの主を守る魔物ってことか」

「ああ。すでに主の意に沿わぬ人間を、最低二人、首を刎ねてる。油断するな！」

元より、油断など出来るはずもない。いまも全身に嫌な汗が噴き出ているし、鳥肌が立っている。

それでも、

「横に付けられるか」

「やってみる」

アーサーが《Eバイク》を駆り、走る馬車の横に並んだ。たちまち、ぶうん、と《ナイトメア》がその長い腕を振るい、日本刀を斬り付ける。

コナンは日本刀を払いつつ、《Eソード》を跳ね上げた。馬車には届かない。だから、腕を狙う。二人目の被害者は、ただのステッキで《ナイトメア》に傷を残した。《Eソード》で出来ない道理はない。

切っ先が腕に接触した瞬間、スイッチを入れた。電流が迸った。

《ナイトメア》が痙攣し、日本刀を取り落とす。落ちた日本刀が《Eバイク》を掠めて石畳の上に甲高い音を響かせた。

「ーまだ！」

コナンが身をかがめ、《Eソード》の切っ先を馬車の車輪に突き入れた。直後に電流を流すと激しいスパークが車輪に走り、馬車のシャフトを破壊した。

片輪を失った馬車が、石畳に跳ね、急カーブを描く。アーサーがとっさに衝突を避け、針路を入れ替えて、馬車の前に回り込む。

「うおっ!?」

ステイプルトンの悲鳴と共に、馬車が街灯にぶつかり、横転した。馬の悲鳴を余所に、《ナイトメア》は素早く飛び出して御者席のステイプルトンを抱き上げた。

《ナイトメア》が路上に着地すると、アーサーが《Eバイク》を急停止するのは、ほとんど同じタイミングだった。コナンが《Eバイク》を飛び降りて、主を抱える《ナイトメア》に駆け寄った。

《ナイトメア》はロジャーをそつと路上に降ろすと、素早くコナンの迎撃体制に入った。片手に持った日本刀を振り上げる。

だが、主を構った時間が隙になった。コナンは《ナイトメア》の一撃を躲し、その胸部、鎧の隙間目にかけて《Eソード》を突き立てる。

「喰らえ！」

出力最大。電撃が《ナイトメア》の巨体を揺さぶった。

《ナイトメア》が声なき悲鳴を上げる。ぶすぶすと身体から細い白煙が上がり、魔物の動きが止まった。「やった！」とコナンが歓声を上げた。

しかし、まだだった。

ギロリ、と《ナイトメア》が首を動かし、コナンを見下ろした。日本刀を逆手に持ち替え、腕を大きく持ち上げた。

不味い。コナンはとっさに後退しようとしたが、《Eソード》が食い込んで抜き取れない。ならばと柄を手放したが、そのときにはすでに、振り下ろされた日本刀の切っ先が眼前に迫っていた。

死のイメージが脳裏を過る。

だが、

「コナン！」

切っ先がコナンに触れるより早く、横から突っ込んだ《Eバイク》が《ナイトメア》に衝突した。

凶刃がコナンの頭上を掠めて外れ、替わりに、衝突寸前に身を投げ出したアーサーの身体が、コナンの上に飛び込んでくる。

「っく!?」

アーサーを抱き止めつつ、コナンがゴロゴロと路上に転がった。目を回すアーサーを石畳に投げ捨て、慌てて立ち上がって体勢を整える。

しかし、さすがの《ナイトメア》も、《Eソード》の電撃に続く《Eバイク》の体当たりは堪えたらしい。辛うじて立ち上がったが、その動きは見るだに鈍っていた。
とはいえ、こちらも武器を失った。

「……アーサー、無事か？」

《ナイトメア》をにらみつつ確認したが、返事がない。コナンは焦ってアーサーの状態を確認。どうやら、さっきの無茶で気絶したらしい。石畳に伏したまま意識を失っている。

不味い。

いよいよ焦燥感が強まった。このままでは逃げることもできない。コナンは奥歯を噛み締め、必死に思考を巡らせる。

ところが、

「くそっ！ もうたくさんだ！ もう嫌だっ！」

なお戦おうとする《ナイトメア》を余所に、ロジャーが背中を向けて走り出した。

コナンの気のせいかな、戦場に残された《ナイトメア》が困惑するのがわかった。どうすればいいのか、途方に暮れるような気配を感じた。

「……お前」

コナンが思わず構えを解く。

そのときだった。

シユパー

嫌に軽薄な、そのくせ神経を逆なでする音が聞こえた。

通りに立ち籠める白い霧。その奥へ消えようとしていたロジャーの背中が、突然動きを止めた。

そして、ほとんど同時に、ビュウ、と破けたホースのように、ロジャーの首元から液状の物が噴き上がった。

まるで噴水のような。どこか滑稽に見えるその光景を、コナンは、なんだ、あれ、と呆気にとられて見つめていた。あまりに突然のことに、精神が麻痺していた。

血。

喉を切られたロジャーの鮮血だ。

やがて、ロジャーの身体が、コテンと横倒しになる。同時に、《ナイトメア》が糸が切れた糸釣り人形のように力なくくずおれた。

精神が麻痺していた。

それでも、コナンは、見た。

ロジャーが走り去ろうとしていた霧の向こうから、人影が現れた。その手には、真新しい血の滴る、ひと振りのナイフがあった。

夜会服姿の男だ。よりにもよって、いま、この場に、夜会服かーとは、コナンは思わなかった。むしろ、男の優雅な佇まいは、その装いにマッチしていた。

いや、そんなことはどうでもいい。男の装いなど、些末な事だ。

もっと言ってしまうえば、男が血に濡れたナイフを携えていることさえ、重要ではなかった。

突然この場に現れたことも、おそらくはロジャーを殺したという事実すら、そのときのコナンにとつては後回しにすべき事柄だった。

そんなことより、遙かに、重大な一点。

男は仮面を被っていた。

横転した馬車を牽く馬が、悲しげな嘶きを上げた。

「……お前は……!?!」

コナンが喘ぐようにささやいた。反射的にアーサーを見たが、まだ意識を失ったままだ。こんなときにと歯噛みしつつも、彼を起こす余裕も、いまはない。

と、そのとき、通りに風が吹いた。風は通りに立ち籠める霧を、ゆつくりと押しやり、拡散した。

霧が晴れる。

そして——今度こそコナンは息を呑み、全身を粟立たせた。

いつの間にか辺り一帯が包囲されていた。路上に。街灯の下に。路地の角に。あるいは建物の屋根に。

何人もの人間が、静かに立って、コナンたちを見つめていた。その全員が、同じ仮面を被っていた。

もう何度も目にした仮面だ。

《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面。

「対象を除去。撤収する」

「目撃者がいる」

「その二人は構わない」

「馬鹿な。掟に例外を？」

「繰り返す。その二人は構わない。撤退する」

「自動機巧人形は？」

「捨て置け。目的はすでに果たした」

男たちの声が、木霊のように空間を歩き来した。中には女の声もあった気がしたがーコナンにはもう、何も判断できない。

やがて、風が吹き、再び通りが霧に煙る。

そして、霧が揺らぎ、わずかに薄らいだとき、すでに仮面の男たちは一人残らず姿を消していた。その間、コナンは指先ひとつ動かさずに、ただ立ち尽くしていた。

しばらくして、やたら場違いな呼吸音が聞こえてきた。アーサーの寝息だ。どっと全身の強張りが緩み、コナンはへなへなと石畳に座り込む。

活動を停止した自動機巧人形。弱々しく藻掻く馬車の馬。ロジャーの死体と、広がる血溜まり。アーサーの寝息。コナンが思考を放棄したとしても、責める者はいなかっただろう。

大きく大きく息を吐き、コナンは弱音を口にする。

「……なるほどな。まさに、悪夢、だ……」

霧の中、遠くから掠れるように、警官隊が吹く笛の音が聞こえた。

クラウドたちが現れたのは、その十分後のことだった。

*

幕間

仮面を外した夜会服タキシードの男は、楽しみに唇を舐めた。

「あれがホームズ家の放蕩児ですか。ふふ。どうして、どうして。案外、隠し球ジョーカーなのでは？ 興味深い対象です」

指示を出し、霧の中を独り歩きつつ、誰にも聞こえない小さな声で、男は誰にともなくささやく。

「関わるなどの指示ですが、こうも向こうから近寄られてはね。さて、どう扱うのが適当でしょう」

血の付いたナイフを無意識に弄びながら、男はトントンと軽快なステップを踏む。どうやら自分分は、少し浮かれているらしい。らしくないが、悪くはない。

「まあいい。せっかくなお近づきになれたのです。あちらに取られるのもつまらない。もう少し、

試してみるとしよう」

ヒュッ、と刃を振るって血を払うと、男はナイフを懐に戻し、何食わぬ顔で大通りに入る。

二輪^ハ辻馬車^ンを拾い、行き先^サを告げた。

通りを照らすガス灯の明かりが、漂う霧の中に浮かび上がる。

男を乗せた馬車は石畳に蹄を響かせ、どことも知れぬ場所へと走り去っていった。